

## 「Service, not self の真意」 その 2

2680 地区 PDG 石井良昌 (尼崎西)

Service, not self を解説するに当たっても、殆どの方はコリンズのスピーチ原稿の存在を知らずに、従ってコリンズのスピーチ原稿を読まずに、「Golden Strand」の内容をそのまま語るものですから、みな様に「コリンズの職業は弁護士。Service, not self とは自己を完全に否定した高次元の考え方。Service, not self を Service above self に変えたのはシェルドン。」だと説いてきたわけです。

ちょうど、伝言ゲームで途中の一人が間違えると、最後にはとんでもない結論に至るのと同じです。ゲームならばともかく、ロータリーの理念を伝えようとするならば、伝聞に頼らずに、必ず一次文献までフィード・バックして確かめる努力が必要です。

「Golden Strand」に記載されている内容を、その出典を明らかにした上でそのまま語るのならばまだましですが、自分の思い込みから、これを高い宗教的次元のモットーだと解説すると、この言葉がとんでもない方向に迷走していく結果になります。或る指導的な立場にあるロータリアンは Service, not self は中世キリスト教神学の思想以外の何者でもない優れた宗教的色彩の強いモットーであって、自分を否定して、宇宙を支配する神の秩序体系に帰依することであると述べていますが、コリンズのスピーチ原稿からはそのような高邁な思想を感じとることはできません。

以下、このスピーチ原稿の内容の概略を紹介します。

ロータリークラブの組織では、なすべきことはただ一つであり、それを正しく始めなければなりません。正しく始めるためには、ただ一つの方法しかありません。自らの利益が得られるかもしれないと思ってロータリーに入ってくる人たちは、間違った部類の人たちです。それはロータリーではありません。ミネアポリス・クラブによって採用され、当初から定着している原則は Service, not self です。

「利他のためにロータリーに入るべきであり、その原則をミネアポリス・クラブでは Service, not self という言葉で表している」という説明であり、この言葉の中に高い宗教的な要素が含まれているとは感じ取られません。

コリンズのスピーチ原稿を読む限り、コリンズのスピーチの根底には相互扶助という考えがあり、ロータリアン以外の人とも積極的に取引を拡大していくべきであると、「無私の奉仕」とは全く異なった考えが表れています。

- 月に 1 回ではなく、毎週 1 回の例会を開催している。
- 外部からの卓話者を呼ばずに会員が実施している。
- 友愛委員会の活動として、昼食例会のチケットを会員の事業所で発売し、会員がそれを買に行くことによって会員間の人間関係を緊密にすることができるし、

新入会員の世話をしたり、会員から提供された食品を集めてディナー会を開催する活動を実施している。

- ロータリアン同士の相互取引が原則であるが、ロータリアンの店だけの取引では限界があるので、積極的にロータリアン以外の人とも取引をすべきである。
- 他の会員との相互扶助も大切である。ロータリアンの紹介によって大きな取引ができた不動産業者の実例。
- ミネアポリス・クラブの会員同士の友情は素晴らしい。何か困ったことがあれば、ミネアポリス・クラブに行きなさい。ミネアポリス・クラブを象徴する言葉こそ、**Service, not self** である。

これが、コリンズが語ったスピーチ原稿のあらましです。

この中から、強い宗教的色彩も、中世キリスト教神学の思想を感じ取れるはずもありません。クラブ会員の親睦の大切さを説き、さらにロータリアン同士の物質的相互扶助の大切さを説きながら、ロータリアン以外の人たちとの取引も勧めるという矛盾に満ちた内容であり、なぜ、**Service, not self** がミネアポリス・クラブに定着している原則なのかが理解できません。

強いてこじつけた解釈をすれば、今まで、会員同士で行ってきた物質的相互扶助を、会員外に広げることによって、それを利他の心と説いたのかも知れません。自らの利益だけを考えずに、他人に奉仕する意味で **Service, not self** という言葉を作ったとすれば、この言葉は職業奉仕のモットーである **He profits most who serves best** を補完する言葉であり、当時の年次大会の雰囲気から考えると当然かも知れません。何れにせよ、**Service, not self** という言葉は、人道主義的活動を意味する **Service above self** とはまったく別次元の言葉だということは間違いありませんし、その **Service above self** が何時、誰によって作られたのかは不明です。現在、1917年までの大会議事録をすべてチェックしましても、その中には **Service, not self** も **Service above self** の文字も見当たりません。

この1910年に創立したミネアポリス・ロータリークラブは1905年に創立したミネアポリス・パブリシティ・クラブが前身で相互扶助を目的にしているのは同じで、この二代目会長のコリンズが会長をした1911年頃のアメリカの時代背景を考えてみたいと思います。アメリカン・ドリームの名を借りた、極端な自由競争の時代であった。ありとあらゆる策を弄しながら、お金を儲けることに狂奔した時代だった。ロータリーが事業経営の中に職業奉仕理念を取り入れて、その法則にのっとった正しい事業経営をすれば、必ず事業の継続的な発展が得られることを実証したからこそ、皆が先を争ってロータリー活動に熱中したのです。一部の人と言うように **Service, not self** が自己を犠牲にして他人に奉仕することを意図する言葉だとすれば、この言葉に魅力を感じてロータリー運動に参加する人は皆無であったことだけは確かである。

1915年にガイ・ガンデカーによって書かれた「A talking knowledge of Rotary」に

は **Service, not self** がそのまま使われていますし、1921年の *The Rotarian* のコリンズの追悼記事には **Service above self** が使われています。面白いことには、1921年の年次大会には、結果的に取り下げになったものの「現在ロータリー・モットーとして使われている **Service, not self**、**Service above self**、**Service before self** を廃止して **He profits most who serves best** のみにする」という提案が出ています。

さらに1923年には決議 23-34において、ロータリーの哲学が **Service above self** に、実践倫理の原則が **He profits most who serves best** と定められ、1950年、決議 50-11によってこの二つの言葉はロータリー・モットーとして正式に定められるという経過をたどるわけです。

現在、**Service above self** は「超我の奉仕」とは、「他人のことを思いやり、他人のために尽くすこと」と訳されています。

そこで、結論としてコリンズの言う **Service not self** の本当の意味を考えますと、コリンズのスピーチ原稿（その2）の文中にある“自らの利益が得られるかもしれないと思ってロータリーに入ってくる人たちは間違った部類の人たちです。それはロータリーではありません”という内容はミネアポリス RC の 25 周年記念誌に次のようなことが書かれております。それは、コリンズが 1911 年 8 月のポートランド大会の数か月前にコリンズとシェルドンは会っていて、この **Service not self** についてシェルドンは **He profits most who serves best.** にきわめて近い職業奉仕のモットーであることと、この **Service, not self** も **He profits most who serves best.** も **Golden Rule** (黄金律) すなわち人にしてもらっていいことは他者にもしなさい。という黄金律であるとシェルドンは述べております。また、この黄金律は哲学であって、宗教的なものでないとシェルドンはあえて述べております。

そこで、私の **Service not self** の意味は従来から行っていた会員同士の相互扶助をさらに広げるとともに、ロータリアン以外の人とも取引をしようという意味なので、「自分自身だけでない奉仕」や「自分さえよかったらいいのではない奉仕」ということとなります。あえて意識すれば「利己と利他の奉仕」としたらよく分かると思います。

さて、**Service, not self** の解釈がこのような結論に至ったことを由としない人たちは、田中毅先生の翻訳が出所不明の怪しげな日本語訳であり、誤訳と誤解の連続であると主張しているようです。しかし、よくよくその主張を聞けば、問題は翻訳ではなく、今まで自分たちがさも本当らしく主張してきた話が、根本から崩れ去ることに対する恐怖や不安であるような気がします。

新しく発見された事実を事実として謙虚に受け止めることができないことは極めて残念なことです。日本人がディベートが不得意である原因として、自説を曲げたり、討論に負けることが、あたかも本人の人格が否定されたことと同じように受け止めることだと言われています。

完全な翻訳は存在しません。米語を日本語に翻訳する場合、ネイティブ・アメリカンでない限り、その言葉の持つ意味を 100%理解することは不可能ですし、日本人でその能力を持っている人は限られているはずです。ネイティブ・アメリカンに近い能力を持っていたとしても、それを日本語に置き換えようとするれば、さらに高い日本語能力が必要になりますし、日本語のような多くの言い回しがある言語では、翻訳者の主観によってその表現は大きく異なってきます。

原文の持つ意味を、例え直訳になってもいいからなるべく正確に伝えようという、RIの公式文献の翻訳が、まるで意味のわからない日本語になっているのも、そのあたりの事情を物語っています。

田中毅先生は次のように謙虚に述べておられます。英文はあらかじめの意味が判ればいいと思って、文章を翻訳しています。正確な内容を理解したい方は、是非、原文をお読みになることをお勧めします。田中毅先生が翻訳した文献の原文は、すべて「源流アーカイブス」に収録していますのでご利用ください。

(2014年6月26日)